

## トゥーキューデイデース『戦史』 2巻40章1～2節の意味<sup>1</sup>

西村圭樹

### 1. 問題の設定

トゥーキューデイデースの歴史書『戦史』は紀元前431年から始まるアテーナイとスパルタの戦争を記述している。事件の展開を時系列に追っていく叙述の折々に、トゥーキューデイデースは短い演説を挟み、戦争の当事者が何を考え、何を話していたのかを記述している。ペリクレスの葬礼演説は、この演説の一つにあたり、戦争初年の終わりに、その年の戦没者のための国葬において語られた言葉にあたる。ペリクレスは、すでに長くアテーナイの国政の中心にあり、スパルタからの最後通牒が届いたときに、勝算はあると語って戦争開始を主導した人物であった<sup>2</sup>。彼の語るこの葬礼演説は、アテーナイ民主政の理念に鋭く踏み込むものであり、アテーナイ民主政の黄金期をつくり出した政治家自身の言葉として、歴史的に非常に重みをもっている。

演説は大きく二つの部分に分かれ、その前半部では、ペリクレスはアテーナイの近年の発展の原動力について語っている<sup>3</sup>。近年の発展として念頭に置かれているのは、ペルシア帝国がギリシア本土に攻め寄せてきたのを、アテーナイが中心となって撃退し、それによってアテーナイが一気

1 本論は東京都立大学哲学会第41回研究発表大会（2017年7月8日）での発表原稿の改訂版である。

2 トゥーキューデイデース『戦史』1巻140-145章。以下、特に断りがないかぎり引用は『戦史』からのもの。また、テキストはH. S. Jonesの校訂によるOCTを使用する。

3 2巻36-41章。

に軍事的政治的な力を増大させ、その後の展開のなかでエーゲ海とその周辺の諸ポリスを事実上支配下においたうえで、アテーナイが経済的・文化的に著しい発展をみせたこと、である。この発展をもたらした原動力について、ペリクレスは三つの観点を提示している<sup>4</sup>。日々何を追求し(ἐπιτήδευσις)、ポリスの政体はどのような状態にあり(πολιτεία)、そして個々人の生き方・姿勢はどのようなものであるか(τρόπος)、という三つの観点である。この三つの観点のなかで、最も重きを置かれるのが、個々人の姿勢である。前半部を締めくくる41章において、ペリクレスは、今日のアテーナイの力を、「ἦν ἀπὸ τῶνδε τῶν τρόπων ἐκτησάμεθα 我々はこの姿勢から獲得した」と語っており<sup>5</sup>、そこには、何を追求するのか、あるいはポリスの政体という言葉は現れない。この、個人の姿勢についての具体的な議論が、41章に先立つ40章に語られていることでは、研究者の意見は一致している。その40章の冒頭には、「φιλοκαλοῦμεν τε γὰρ μετ' εὐτελείας καὶ φιλοσοφοῦμεν ἄνευ μαλακίας 儉しさとともに美しさを愛し、弱々しきなしに知恵を愛する」という文章があり、アテーナイ人の姿勢を一般的に表す文章として、特に重要な位置を占めている。しかし、その具体的な意味についていまだに定説がなく、議論は紛糾している。その研究の展開は次のようになっている。

伝統的には、この文は建築や美術工芸、演劇、学芸などにおけるアテーナイの文化的繁栄を指していると理解され、この文を根拠に、アテーナイ人の文化を重視する姿勢が打ち出されていると論じられていた<sup>6</sup>。その理解は、Marchant (1891) が簡潔に記すように、「φιλοκαλοῦμεν 美しさを愛する」ことを美術工芸を指すものと考え、「φιλοσοφοῦμεν 知恵を愛する」

4 2巻36章4節。

5 2巻41章2節末尾。

6 例えばPoppo (1843) Vol. I., Sect. II., p.70 は「φιλοσοφοῦμεν 知恵を愛する」という語を「litteris studemus 学芸に熱意を傾けている」と訳し、この語がスパルタが弁論や哲学にかかわることを市民に禁じたこととの対比を打ち出しているのだとする意見を参照している。また、Croiset (1886) p.376 は、「εὐτέλεια 儉しさ」を「simplicité 質朴さ」と理解し、その質朴さは黄金や象牙といった高価な材料を使うことを排除せず、ただ無駄な、そして悪趣味な豪華さを排除しているのだと論じ、また「φιλοσοφοῦμεν 知恵を愛する」について、この言葉は狭義における哲学を指すのではないとしつつ、この言葉を「nous aimons les choses de l'esprit 私たちは精神を豊かにするものを愛する」と理解している。

ことを文化一般を指すものとする解釈に要約できる<sup>7</sup>。この解釈は、この一文についての基調的な理解となっている。ただ、Gomme (1956)をはじめとして、この伝統的解釈には様々な異論が示されている。Gommeは、「φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας 儉しさとともに美しさを愛する」における「εὐτέλεια 儉しさ」が、金銭についての儉約を意味するものであることを示し、パルテノン神殿をはじめとした当時のアテーナイの建築や工芸は儉約という発想と相容れないものであることを指摘して、伝統的な解釈に疑問を示した<sup>8</sup>。このGommeの指摘を受けて、伝統的な解釈には揺らぎが生まれ、それ以来様々な解釈が提示されている。Wardman (1959)は独自の解釈として、この文の意味を、戦時の儉しさとともに平時においては価値ある物を愛し、戦いにおける弱々しさをなしに、決断を下すまえに（民会などにおいて）徹底した議論をおこなうことを愛する、と理解する解釈を示している。ただこのWardmanの解釈は、「φιλοκαλοῦμεν 美しさを愛する」という動詞と「μετ' εὐτελείας 儉しさとともに」という前置詞句が、それぞれ平時と戦時という別々の領域について述べていることを前提としており、Wardman自身も認めるように、文章に明示的に現れていない意味を読み込む必要がある<sup>9</sup>。ただ、Wardmanの議論には有益な点も多く含まれるため、後に再び参照したい。

7 Marchant (1891) p.174 注 '(この一文に含められる言葉は) They not only defend Athenian ἀνδρεία, but contain sound advice to his hearers not to let their love of art degenerate into bad taste, and mere display, nor their culture undermine their manliness.' (下線は筆者による)

8 Gomme (1956) pp.119-121. ただ、Gommeは伝統的解釈に疑念を呈しつつ、その否定はおこなっていない。『戦史』41章2節につけた注でそれまでの内容を次のように振り返っている。'[T]he present power of Athens proves not only the courage, energy, and political ability of her citizens, but that their enjoyment of leisure, their pre-eminence in art and learning, their versatility and their insistence on government by discussion and democratic discussion, had not impeded, but helped the exercise of those virtues.' (p. 127, 下線は筆者による)

9 Wardman (1959) p.42. 注2 '(自身の解釈をふまえた上での訳文について) This translation seems to distort the use of μετά. For instance, in Thuc. 1. 120. 5 . . . μετ' ἀσφαλείας μὲν δοξάζομεν . . . , the μετά phrase and the verb both refer to the same time, whereas the translation here is based on a distinction between peace-time behaviour and war-time behaviour. However, since the main notion is of Athenian life as a whole, even though the description can be completed only by reference to behaviour in two sets of conditions, this makes it possible for the words μετ' εὐτελείας to act as substitute for some such expression as φιλοκαλοῦμεν τε γὰρ καὶ εὐτέλως διατιόμεθα.'

この Gomme と Wardman の後に、de Romilly (1962) は伝統的な解釈の維持を試みており、「φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας 俊しさとともに美しさを愛する」が日常生活での質朴な文化的嗜好を指すと考えて<sup>10</sup>、パルテノン神殿が主に念頭に置かれているのではないと Gomme に反論している。また、Rusten (1985) は別の角度からこの文章の文脈を理解し、この一文は社会のなかで哲学的な活動に携わる人々に言及していると解釈している<sup>11</sup>。Rusten はこの結論を、この一文を含めた 40 章冒頭の三つの文章の関連から論じている (三つの文は第 2 節で確認する)。Rusten によれば、最初の文は哲学的活動を指し、二つ目は経済的な活動、三つ目は政治的な活動を指している。そしてその三つの活動は、プラトーンとアリストテレスの哲学文献に現れる社会区分と同じであると Rusten は論じ、その共通性を根拠に、『戦史』のこの箇所においてもその社会区分が打ち出されているのだと論じている。この Rusten の解釈は、40 章冒頭の「φιλοσοφοῦμεν 知恵を愛する」が学芸を指すと考える伝統的な解釈を踏襲しつつ、この語は観想的な哲学を指すのだとより踏み込んだ解釈をおこない<sup>12</sup>、さらに「φιλοκαλοῦμεν 美しさを愛する」の節は美術工芸ではなくこの哲学的活動を指していると考えたことで、Gomme の疑問に答えようとしている<sup>13</sup>。このように、de Romilly のように伝統的な解釈を維持するにせよ、あるいは Rusten のように伝統的な解釈を修正発展させるにせよ、40 章冒頭の一文に何らかの意味での文化的な要素——建築、美術工芸、演劇、学芸、あるいはより狭義の哲学——のみを読み取る解釈は、その一文を含めたこの箇所の三つ

10 de Romilly (1962) p.97 注 '(40 章 1 節は) [Il] s' agit, au moins autant, du genre de vie, des bijoux, de la littérature, des cérémonies, etc... (中略) [Il] faut montrer que les goûts athéniens peuvent être satisfaits sans impliquer un excès (後略).'

11 Hornblower (1991) pp.304-305 はこの Rusten の意見のみを参照している。

12 この解釈の初出は Rusten (1985) であるが、同じ意見を簡潔にまとめた Rusten (1989) p. 152 には次のようにある。 '(ペリクレースの) His occupational categories — lovers of wisdom (intellectuals), of wealth (businessman) and of public service (politicians) — are meant as alternatives; it would be preposterous to ascribe to every single Athenian citizen the simultaneous pursuit of philosophy, wealth and political power (後略)。(イタリックは Rusten、下線は筆者による)

13 Rusten (1985) p.17, 注 19 '(φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας についての Gomme の議論を引用した上で) On an individual level, however, φιλοκαλοῦν is virtually a synonym for φιλοσοφεῖν (中略); it is closer to the aristocratic ἐπὶ τῶν καλῶν (中略). The praise of an individual for εὐτέλεια is entirely conventional (後略).'

の文章の関連からみて困難がある。その点を後に確認していきたい。

最後に Bosworth (2000) は、葬礼演説がおこなわれた当時の歴史的な文脈のなかにテキストを据え直すことで、新たな解釈を探っている。ペリクレスは、陸軍国のスパルタ率いるペロポネネソス同盟軍の侵攻に備えて城壁外の田園部を放棄し、代わって海軍国のアテーナイの艦隊でもって敵国を攻撃する戦略をとった。そのため、田園部の市民らは先祖代々の土地を捨ててポリスの城壁のなかに避難しており、その年のあいだ、その市民たちは自分たちの財産が破壊されていくのを目にしていた。それにもかかわらず、その年のアテーナイ側の戦果は乏しかった。ペリクレスはその市民たちを前にして葬礼演説を語っており、演説がおかれた場の文脈をまず読み取る必要がある。このように Bosworth は論じた上で、40章冒頭の一文は、田園部の市民にとって馴染みの薄い中心市の活動を正当化するねらいがあると解釈している。Bosworth の解釈によれば、パルテノン神殿や演劇などの豪華な建築物や催事には大量の資金がかかり、そのようにアテーナイ人は資金を費やして美しさを追い求めている (φιλοκαλοῦμεν) が、しかしそれも、贅沢におほれることを意味しない (μετ' εὐτελείας)。というのも、富者は軍資金を供給し、貧者も勤勉に働くことで共同体に貢献しようとしているからである<sup>14</sup>。また、「φιλοσοφοῦμεν 知恵を愛する」は弁論における機知を表し、特に民会や裁判での議論を念頭に置いていると Bosworth は解釈する。そのような議論は、それに慣れない市民にとっては無駄にみえるかもしれないが、しかしそのように議論によって熟慮し

14 Bosworth (2000) p.11 'Athens' love of the beautiful could be construed as extravagance, the temples of the Acropolis an unfair imposition upon the resources of the allies, while the poor could idle their time away on a constant diet of shows and festivals. (中略) Pericles' reply to the implied criticism is brief but effective. We may have a taste for the beautiful, but we are not slaves to luxury; the rich give their resources to promote the war effort, while the poor feel a moral obligation to achieve self-sufficiency and contribute to the collective.' Bosworth に言及はないが、この Bosworth の解釈は Larson (1971) の内容を発展させたものと理解できる。Larson は、μετ' εὐτελείας についての Gomme (1956) の指摘を参照しつつ、この εὐτέλεια を、建築や美術工芸についてではなく、個人の姿勢として理解すれば Gomme の指摘する問題は回避できると論じている。'Since εὐτελής when applied to people means "frugal," or "thrifty," the first clause [φιλοκαλοῦμεν...μετ' εὐτελείας を指す] would then mean "we love beauty with frugality." That is, "our love of beauty does not make us spoiled or extravagant in our personal lives.'" (p.68)

たからこそ (φιλοσοφούμεν), 陸を捨てて海で戦うという今回の戦略が実行できたのであり, 議論を追求することは決して弱々しさを意味するものではない (ἄνευ μαλακίας)<sup>15</sup>. この Bosworth の理解は, 中身としては Wardman の解釈に共通するところが大きく, 特に「φιλοσοφούμεν ἄνευ μαλακίας 弱々しさをなしに知恵を愛する」の意味については, Wardman と同じ解釈をとって, この箇所を学芸に理解する伝統的解釈に反論している. 他方で, Bosworth は「φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας 儉しさとともに美しさを愛する」について, Wardman が動詞と前置詞句をそれぞれ平時と戦時に区別したように, 「φιλοκαλοῦμεν 美しさを愛する」を建築や演劇への言及と理解し, 「εὐτέλεια 儉しさ」を, 富者がポリスに軍資金を供給し, 貧者が自分に出来る限りポリスに貢献することに理解している. しかし, Wardman の場合と同じように, なぜこのわずかな言葉のなかで, 一方で文化活動が語られ, 他方でポリスへの貢献という別の領域の内容が語られるのか, テキストに明示的な根拠はなく, Wardman のようにテキストに対して読み込みをおこなう必要がある. その点, より読み込みの少ない解釈を探る余地が残されている. ただ, Bosworth の解釈にも有益な点が含まれているため, 後に参照したい.

このように, 40章冒頭については様々な説が示されているが, 大きくまとめると, この一文を広義の文化への言及としてみる伝統的な解釈が基調にあり, その解釈に対する重要な指摘として Gomme のコメントがあり, 修正案として Rusten の提案があり, 代替案として Wardman と Bosworth の提案がある. ただ, Rusten による指摘以来, 40章冒頭の一文が, それにつづく二つの文章と関連性をもっていることが認識され, Bosworth もその点を取り入れて考察をおこなっている<sup>16</sup>. この論文では, この一文を

15 Bosworth (2000) pp.11-12.

16 Bosworth は, 特に εὐτέλεια についての解釈を, 問題の一文 (φιλοκαλοῦμέν 以下の一文) につづく文章との関連から根拠付けている. 'The boast that love of the beautiful is combined with economy is enlarged by a statement that the Athenians use their wealth not for ostentation but as a resource for action, while the poor see it as a duty to escape poverty and bend all their efforts to doing so. Frugality (εὐτέλεια) takes the emphasis. The Athenians might have a love of beauty, expressed above all in the buildings of the Acropolis and the public festivals of the city, but it takes place against a background of industry.' (pp.10-11, 下線は筆者による)

含む40章1～2節の三つの文章の意味について、伝統的解釈に反論しつつ、テキストの文脈に根差した解釈を探っていきたい。

## 2. テキストの確認

40章冒頭には次の三つの文章がある。

(a) φιλοκαλοῦμέν τε γὰρ μετ' εὐτελείας καὶ φιλοσοφοῦμεν ἄνευ μαλακίας·  
(a-1)なぜならまず、私たちは儉しさとともに *kalon* を愛し、(a-2)  
弱々しさをなしに知恵を愛する。

(b) πλούτῳ τε ἔργου μᾶλλον καιρῷ ἢ λόγου κόμπῳ χρώμεθα, καὶ τὸ  
πένεσθαι οὐχ ὁμολογεῖν τινὶ αἰσχρόν, ἀλλὰ μὴ διαφεύγειν ἔργῳ  
αἴσχιον.<sup>17</sup>

(b-1) そして、私たちは富を、言葉の上での自慢として用いるよりも、行動のための適切な出費に用い、(b-2) また、貧しいことを認めることがその人の恥なのではなく、行動によって貧しさから脱却しようとしなことがより恥ずかしいのである。

(c) ἐν τε τοῖς αὐτοῖς οἰκείων ἅμα καὶ πολιτικῶν ἐπιμέλεια, καὶ ἑτέροις  
πρὸς ἔργα τετραμμένοις τὰ πολιτικὰ μὴ ἐνδεῶς γινῶναι.

(c-1) さらに、自らのことと同時にボリスの事柄にもまったく同じように取り組み、(c-2) また、それ以外の人々も、仕事に励み忙しくしているのにもかわらず、ふかくボリスの事柄を熟知している<sup>18</sup>。

17 OCTのテキストは、この文末にフルピリオドをつけている。ただ、(a)~(c)が一体となっていることが、本論の示したい論点の一つであり、ここでは本論の解釈での句読点をつけた。

18 (c-1)は直訳では「同じ者たちに、自らのことと同時にボリスの事柄への取り組みがあり」となる。Gomme (1956) p.121の時点では、その「τοῖς αὐτοῖς 同じ者たち」はアテーナイ人全体を指すと理解されていたため、(c-2)での「ἑτέροις それ以外の人々」が誰を指すのかが問題となり、テキストの修正案が採用されていた。しかし、Edmunds (1972)は、(c-1)が特に政治に取り組む市民を指し、(c-2)が普段は仕事に忙しいが政治も熟知している他の市民を指すと理解すればテキストに問題はないと指摘し、Rusten (1985) p.18とBosworth

(a)において先に美しさと訳した *kalon* という表現は、大きく三つの意味に解釈可能であり、先行研究において、すでにその三つの意味のそれぞれについて解釈が提出されている。一つは、美術工芸の美的な美しさを指すとする解釈であり、伝統的な解釈がこれにあたる。二つ目は、主に行動についての倫理的な意味での高貴さ、立派さを指すと考える解釈であり、Rusten がこの解釈を提案している。三つ目は、一般的に価値がある（典型的にはものの質について用いられる）ことを指すと考える解釈であり、Wardman は基本的にこの立場をとって、ここでの *kalon* には交易品などの物質的な豊かさも含められていると考えている<sup>19</sup>。この三通りの意味のそれぞれで解釈可能であるため、ここでは訳語をあてることは控えておく。また、これら三つの文章の目立った特徴として、テキストに下線を引いたように、「そして」という意味の接続詞 τε...καί が同じ位置にある<sup>20</sup>。このため、同じ文構造が反復されており、これら三つの文章が何らかの関連をもっていることが示唆される。そこで、(a)の意味を考えるうえで、まず(b)と(c)の意味について検討したい。

(2000) p.12. 注51もこの点において同様の解釈を示している。Rusten は特に、ここでの τοῖς αὐτοῖς は、比較される二つの要素 (οἰκείων ἅμα καὶ πολιτικῶν ἐπιμέλεια) を結びつける以上の意味はなく、実質的に副詞的に理解されるべきであるとコメントしている (p.18)。本論での訳文は、まずこのRustenの指摘をふまえ、また、二つの領域への「ἐπιμέλεια 取り組み」が「ἅμα 同時に」同じ人において両立している点が強調されていることから、(c-1)の文脈では、単に二つの領域への取り組みをもつのみならず、その二つの領域に等しく力を注いでいることに力点があると考え、その点を訳文に反映させた。

19 Wardman (1959) p.39 'The καλὰ (中略) should not be restricted to magnificent temples, though they are no doubt included. The καλὰ (中略) include (1) 'contests' and sacrifices, (2) splendid private property, (3) wide variety of imports.' Wardman は φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας の訳文として 'Our passion for good things is compatible with economy.' (p.39. 下線は筆者による) を挙げている。

20 先に述べたように、この文章の構造に特に注目したのがRusten (1985) pp.14-15である。



3. (b) と (c) の意味とつながり<sup>21</sup>

(b)と(c)の意味は比較的判明としている。(b)では、(b-1)アテナイ人が経済的な富を(πλούτω),言葉の上だけの自慢のため(λόγου κόμπω)ではなく、行動のために用い(ἔργου...καιρῶ...χρώμεθα)。(b-2)また、貧しいことを認めることが人の恥ではなく(τὸ πένεσθαι οὐχ ὁμολογεῖν τινὶ αἰσχρόν),行動において、貧しさから脱却しようとしないうことが、より恥ずかしい(μὴ διαφεύγειν ἔργω αἰσχίον)とある。この(b)では、単なる言葉(λόγου κόμπω, τὸ πένεσθαι...ὁμολογεῖν)と対比される、具体的な行動(ἔργου...καιρῶ, διαφεύγειν ἔργω)に重点が置かれている。その行動は、(b-2)においては、貧しさから脱却するための行動であり、それは既存の経済的な地位に甘んじずに、自らの地位の改善を目指してより発展していこうとする行動である。その(b-2)と同様の姿勢を(b-1)においても読み取ることができる。(b-1)では、富を言葉で自慢するのではなく、行動において具体的に活用していくことが語られている。そのときに、行動と対比されるところの自慢は、具体的な成果のないところで、単に富をもっていることを誇ることを指しており、富裕であれば、富を単にもっているのではなく、具体的な成果のために活用していくことが(b-1)において語られている。その点、(b-1)は、自分の経済的地位に満足することなく、積極的に成果を追い求める姿勢を打ち出しており、その姿勢は、(b-2)での、自分の経済的地位に甘んじることなく、地位の改善という新たな成果を追い求める姿勢に共通している。そして(b-2)は、このように既存の地位に甘んじずに、新たな成果を追い求める姿勢に加えて、その姿勢が表す価値基準を語っている。即ち貧しい人は、自分の貧しさ自体を恥と思わないために(τὸ πένεσθαι οὐχ ὁμολογεῖν τινὶ αἰσχρόν)、自分の財産によって自分を賤しいとは思わずに、むしろ貧しさからの脱却という成果のための行動(διαφεύγειν ἔργω)をする

21 (b)と(c)のつながりについては、注17に述べたように、OCTは(b)の文末にフルピリオドを置いており、(b)と(c)の間で文の流れが切れるという理解が一般的である。そしてRusten(1985)も、(a)~(c)の三つの文の関連性を論じつつも、この三つの文は社会区分を列挙するものであって、内在的な結びつきはないと考えることから、三つの文すべての文末にフルピリオドを置いている(p.14)。ただ、本論は、(b)と(c)の間に内在的な結びつきを理解しており、その点をこの第3節において考えていきたい。

かしないかという基準で恥と立派さを考えている。以上をふまえると、(b)では、富裕な者も貧しい者も、行動によって具体的な成果をおさめることを日々の目的としていることが語られ、(b-2)では貧しい人について、財産の多寡ではなくその行動が個人の価値基準となっていることが付け加えられている。

これにつづく(c)では、(c-1)個人の私的な活動と、ポリスのための活動に、同じように取り組むことが語られ(ἐνι τε τοῖς αὐτοῖς οἰκειῶν ἅμα καὶ πολιτικῶν ἐπιμέλεια), (c-2)それ以外の人々も(καὶ ἑτέροις), 自分の仕事に忙しくしているもの(πρὸς ἔργα τετραμμένοις), ポリスの事柄を熟知しているとある(τὰ πολιτικὰ μὴ ἐνδεῶς γνῶναι)。 (c-2)での、「ἑτέροις それ以外の人々」は、ポリスの活動に取り組む(πολιτικῶν ἐπιμέλεια) 時間的余裕のない人、つまり生計を立てる仕事に忙しい(πρὸς ἔργα τετραμμένοις) 一般人を指している<sup>22</sup>。そのため、(c-1)での、ポリスの活動に取り組んでいる人々は、そのように日々の仕事に忙しくする必要がない、経済的に富裕な人々であることが読み取れる<sup>23</sup>。その点(c)は、(b-1)において富者(πλούτω)が、(b-2)において貧者(τὸ πένεσθαι)が言及されているのと同じ構造をもっている。そして、(c)では総じて、個人の私的な活動と、ポリスの公にかかわる活動との関係が語られている。富者は公私のどちらかを他方よりも優先させることがなく、また貧者も、その生活の条件ゆえに公の活動に私の活動と同じように時間を割くことはできないものの、しかしポリスの事柄を深く熟知することを怠らないとある。

このように、(b)は私的な経済について述べ、(c)はその私的な経済と公的な活動のバランスを語っている。これらの点をおさえた上で、(b)と(c)のつながりを考えてみたい。(b)から(c)への移行のなかで、文が念頭に置いている領域が拡大している点がまず認められる。(c)は(b)の扱っていた私的な経済に付け加えて、その私的な経済とポリスの公にかかわる

<sup>22</sup> 注18を参照されたい。

<sup>23</sup> このように、(c-1)と(c-2)において異なる社会階層の人々が念頭に置かれているという理解を明確に打ち出しているのがBosworth (2000) p.12, 注51である。

活動とのバランスを語っているからである。そして、この領域の拡大という点に加えて、(b)と(c)にはより内在的な結びつきが認められる。

(b-1)は、富を言葉の上で誇示する(λόγου κόμπω)のではなく、具体的な成果のための行動に用いる(ἔργου...καιρῶ...χρόμεθα)という姿勢を語っている。その姿勢は、富を単に誇示するよりも、より中身のある成果のために富を活用するという比較を示すことで、富を単に誇示するだけの姿勢を否定し、具体的な行動を実行していく姿勢を語っている。他方で、(c-1)での、自分の私的な活動に劣らずに、ポリス公共の事柄にも取り組むという姿勢(ἐνι τε τοῖς αὐτοῖς οἰκείων ἅμα καὶ πολιτικῶν ἐπιμέλεια)は、私的な領域に留まることなく、ポリスの公的な活動にも意欲的に取り組むことを語っている。そのときに、公私両方の活動への「ἐπιμέλεια 取り組み」をもつためには、自分をポリスよりも優先させず、常に自分のための活動とポリスのための活動に等しい努力を注ぐ必要がある。この、自分をポリスよりも優先させず、自分のためと同程度にポリスのためにも行動するという(c-1)での姿勢は、(b-1)において否定されていたところの、自らを誇示するために富を用いるだけの姿勢とは相容れないものである。というのも、行動と対比されるところの、自らの富の誇示(λόγου κόμπω)は、ポリス公共のために何かを為すという取り組み(ἐπιμέλεια)にはつながらず、むしろ自分の評判のために自らを誇示することを目的としている。そのように富を誇示するだけの姿勢は、自分をポリスよりも優先させず、公私両面に等しく取り組みをもつ姿勢にはつながらない。このため、(b-1)において、行動を実行していき、単に富を誇示することを否定する姿勢は、(c-1)において、私的な活動と同程度にポリス公共のために行動するという姿勢を語る上での重要な前提になっている。

また、(b-2)は、自分の財産が乏しいことが恥ではなく(τὸ πένεσθαι οὐχ ὁμολογεῖν τινὶ αἰσχρόν)、その貧しさから脱却する努力をしないことがより大きな恥である(μὴ διαφεύγειν ἔργῳ αἰσχίον)と語っている。そのため、(b-2)は、今現状で所有している財産の少なさでもって、自分の恥と立派さを考えるのではなく、富とは独立の価値基準をもつべきであることを語ってい

る。そのように、自分の恥と立派さを、富という経済的な階層に縛られた概念でもって考えないことは、(c-2)において一市民としてポリスの政治にかかわっていく積極性を抱く上で、非常に重要な前提となる。このため、(b-1)は(c-1)の、(b-2)は(c-2)の重要な前提となっており、(b)での私的な経済についての姿勢を前提とすることで、(c)でのポリスの公の活動についての姿勢へと説得的に話が広がっている。

#### 4. 伝統的解釈への批判

このように、(b)は(c)よりも扱う領域が狭く、(c)の前提となっていることをふまえると、(a)～(c)のまとまりのなかでの(a)の位置付けについても想定を立てることができる。つまり(a)は、(b)よりも狭い領域を扱い、かつ、(b)の前提となるような内容を語っている可能性が高い。この理解からみると、(a)についての伝統的な解釈は、この要件を満たすものではないことが指摘できる。「儉しさとともに*kalon*を愛する」という(a-1)を、美術工芸の美しさの愛好に理解し、「弱々しきなしに知恵を愛する」という(a-2)を、学芸の追究に理解する場合、(a)は(b)～(c)の内容とは無関係な内容を語ることになる。美術工芸の愛好と、学芸の追究が、(b)での自分の財産(πλούτω..., τὸ πένεσθαι...)についての意識と、(c)でのポリス公共への貢献意欲(...πολιτικῶν ἐπιμέλεια, ...τὰ πολιτικά...γνώναι)の前提となる内容を有しているとは考えにくいからである。そして、(a)～(c)が、このように互いに結び付かない別個の内容をもつことは、その言葉遣いからみて不自然である。先に確認したように、(a)～(c)は文構造において同じパターンを繰り返しており、(b)と(c)が結び付いている以上、このパターンの反復が、まったく無意味でないことが指摘できる。このため、(a)～(c)を内容的に結び付けるような(a)の解釈を探る余地が残されている。そこで、伝統的な解釈に対する異論を検討しつつ、(a)の意味を探っていきたい。

## 5. (a-2) の検討

Wardman (1959) は, (a-2)「φιλοσοφοῦμεν ἄνευ μαλακίας 弱々しきなしに知恵を愛する」を, 学芸や文化への言及として理解する伝統的な解釈に反論し, (a-2)は40章3節の文脈で理解すべきであると論じている<sup>24</sup>. 40章3節には次の文章がある.

διαφερόντως γὰρ δὴ καὶ τόδε ἔχομεν ὥστε τολμᾶν τε οἱ αὐτοὶ μάλιστα καὶ περὶ ὧν ἐπιχειρήσομεν ἐκλογίζεσθαι: ὁ τοῖς ἄλλοις ἀμαθία μὲν θράσος, λογισμὸς δὲ ὄκνον φέρει. κράτιστοι δ' ἂν τὴν ψυχὴν δικαίως κριθεῖεν οἱ τὰ τε δεινὰ καὶ ἡδέα σαφέστατα γινώσκοντες καὶ διὰ ταῦτα μὴ ἀποτρεπόμενοι ἐκ τῶν κινδύνων.

なぜならこのこともまた, 私たちはより優れた仕方です身に備えているのであり, その結果, 同じ私たちが, 極めて果敢な行動にでるのとまったく同じように, これから試みようすることについて考え抜くのである. このことについて, 他の者たちにおいては, 無知が向こう見ずな果敢さを, 熟慮がためらいをもたらす. だが恐ろしいことと快いことを最もはっきりと理解し, それによっても危険に背を向けない者が, その心において最も強靱であると正当に評価されるであろう.

40章3節では, 熟慮 (λογισμός) を行動の前提として, 徹底的に考え抜きつつ (περὶ ὧν ἐπιχειρήσομεν ἐκλογίζεσθαι), 極めて果敢な行動に打って出る (τολμᾶν...μάλιστα) ことが語られている (テキスト下線部). (a-2) の知恵 (φιλοσοφοῦμεν) が, ここでの熟慮 (λογισμός) であり, (a-2) での弱々しきなしにという限定 (ἄνευ μαλακίας) が, 頭で考え抜きつつ (ἐκλογίζεσθαι),

24 Wardman はこの結論を, 「φιλοσοφοῦμεν 知恵を愛する」と「ἄνευ μαλακίας 弱々しきなしに」の間の逆説性 (paradox) を手掛かりに導いている. 通俗的な考え方からすると, 知恵を愛することは, 行動するうえでの障害であると考えられており, 知恵を愛しつつ弱々しきをもたないことは, その通俗的な考え方からすると逆説的に聞こえる. 'The sense is — 'we Athenians can reflect and also be brave', and the 'commonplace' in view is therefore 'thinking is an impediment to action, or incompatible with courage in action'. This is shown by parts of 2. 40, where Pericles asserts that for other people λογισμός brings ὄκνον, whereas ἀμαθία brings them confidence.' (p.38) このとき, Wardman が2巻40章に引いている箇所が40章3節にある.

行動においても果敢であること (τολμᾶν...οἱ αὐτοὶ μάλιστα) に対応する。このため、Wardman は40章内部の文脈を根拠に、(a-2)では、知恵を追求し(φιλοσοφοῦμεν)、そのように徹底的に考え抜きつつ(περὶ ὧν ἐπιχειρήσομεν ἐκλογίζεσθαι)、果敢に行動に打って出ることができ(τολμᾶν...μάλιστα)、他の人々のように熟慮(λογισμός)からためらい(ὄκνον)の弱々しさをもつことがない(ἄνευ μαλακίας)、ということが語られていると理解する。その知恵は、ここでの文脈では果敢に行動するための熟慮であって、観想知ではなく実践知が念頭におかれている<sup>25</sup>。そのため、Rusten (1985)が考えるような哲学的観想の知恵は、この文脈には直接適合するものではないことがここでも確認できる。このWardmanの理解は、40章の文脈に支えられており、「弱々しさをなしに知恵を愛する」という文章の理解としても自然であることから、妥当な解釈である<sup>26</sup>。

25 Wardman は、実践的な知恵が意味する内容として、主に政治的な意思決定において言論を戦わせることを考えている。'I suggest then that in Thucydides too the word means 'we like skilful discussion', by which is chiefly meant the habit of arguing on both sides about matters of policy.' (p.40, イタリックはWardmanによる)。Wardman は、このように知恵の意味として政策論争を主に考えているものの、「知恵を愛する」という言葉により広い範囲の含意があってもおかしくはない。現に、葬礼演説は政治的意思決定(主に37章1節)に留まらず、軍事(39章)についても述べている。その軍事についての言及をまとめる箇所には、「τρόπον ἀνδρείας 生き方・姿勢から生まれる勇敢さ」(39章4節)という言葉があり、軍事についての備えが、主に40章において語られる「τρόπος 姿勢」と無縁のものではないことが示唆される。このため、40章冒頭での「φιλοσοφοῦμεν 知恵を愛する」は少なくとも政治(37章)と軍事(39章)における知恵を含意していると言え、ある程度広い範囲の知恵を意味していると考えるのが自然である。

26 Bosworth (2000) はこのWardmanに近い立場をとっている。'It is fatally easy to translate φιλοσοφοῦμεν as 'philosophize' and to conclude that the text refers to the passion for theoretical speculation that made the sophists the social centre of cultured young Athenians. On the contrary, Pericles enlarges on the sentiment by emphasizing the Athenians' involvement in the political life of their city, and it is the public deliberation of state business that he particularly addresses.' (p.11) このBosworthの理解についても、Wardmanの場合と同様の指摘ができる。つまり、ここで念頭に置かれているのが、観想知ではなく実践知であるという点は、文脈に根差した妥当な理解であるものの、その知恵を民会や法廷での論争における知恵に限定するのは、知恵を狭く理解し過ぎる。39章を根拠に、少なくとも軍事的な場面での知恵も含まれてよいのではないかと

## 6. (a-1)の参照箇所——演説後半部への流れ

(a-1)「φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας 儉しさとともに *kalon* を愛する」については、第4節に確認した(a)～(c)のつながりの要件を満たす解釈が先行研究において得られなかったため、独自に考える必要がある<sup>27</sup>。この *kalon* の意味を考えるうえで、重要な参照箇所が、演説の後半部分に現れる。41章において、アテーナイが今日の力を、これまでに語った姿勢から獲得したと語った箇所 (...ἡ δύναμις τῆς πόλεως, ἦν ἀπὸ τῶνδε τῶν τρόπων ἐκτησάμεθα...) <sup>28</sup> につづいて、アテーナイのポリスは、この力をあまねく世に知らしめること (οὐ δὴ τοι ἀμάρτυρον γε τὴν δύναμιν παρασχόμενοι)、永遠に人々の驚嘆の的となるであろう (τοῖς τε νῦν καὶ τοῖς ἔπειτα θαυμασθησόμεθα) とペリクレスは語り<sup>29</sup>、そのようなポリスの存立をかけて (περὶ τοιαύτης...πόλεως)、この戦没者たちはポリスに命を捧げたのである (δικαιοῦντες μὴ ἀφαιρεθῆναι αὐτὴν μαχόμενοι ἐτελεύτησαν)、と演説はつづく<sup>30</sup>。この後の42章において、演説は戦没者への賛辞へと移っていくが、この戦没者への賛辞においても、前半部の内容は密接にかかわってきている。前半部の議論は、アテーナイのポリスが、永遠に人々の驚嘆の的となるような存在であるという点に終着したが (τοῖς τε νῦν καὶ τοῖς ἔπειτα θαυμασθησόμεθα) <sup>31</sup>、42章1節においてペリクレスは、その前半部を長々と語った理由を次の点に求めていく。つまり、敵に比べていかに偉大なポリスの存立をかけて今戦争がおこなわれているのか (μὴ περὶ ἴσου ἡμῖν εἶναι τὸν ἀγῶνα καὶ οἷς τῶνδε μηδὲν ὑπάρχει

27 伝統的解釈の問題点は第4節において確認した。Wardman (1959) は(a-1)について、戦時の儉しさとともに平時においては価値ある物を愛するという解釈を提案しているが、この理解も(b)の前提になるものではない。Bosworth (2000) は「μετ' εὐτελείας 儉しさとともに」を(b)との関連から解釈しており、その点でμετ' εὐτελείαςが(b)の前提となっていることは確認できる。ただ、「φιλοκαλοῦμέν *kalon* を愛する」についての解釈は伝統的な解釈を踏襲しており、その点についての解釈は(b)とは無関係な内容を理解することになる。そのため、(a-1)「φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας 儉しさとともに *kalon* を愛する」を、ポリスへの貢献をおこなうとともに、建築や演劇の美しいものを愛すると理解するBosworthの解釈のなかで、φιλοκαλοῦμένという言葉がどのように(b)の前提となり、また、そのように理解された(a)の全体がどのように(b)の前提となるのか、明確な関連を読み取ることはできない。

28 2巻41章2節。

29 2巻41章4節。

30 2巻41章5節。

31 2巻41章4節。

ὁμοίως), ポリスについての演説によって明らかになるのであり、同時に (καὶ...ἄμα) そのようにアテナイのポリスが偉大であると示すことが証しとなって、戦没者への賛辞も明らかにするのが (τὴν εὐλογίαν ἅμα ἐφ' οἷς νῦν λέγω φανεράν σημείους καθιστάς), 前半部の言葉なのであると語られる<sup>32</sup>。そして、42章2節において、その戦没者への賛辞も、「εἰρήται αὐτῆς τὰ μέγιστα その大部分がすでに語られたのだ」とペリクレスは語り、それについで、「ἄ...τὴν πόλιν ὑμνησα 私がポリスについて称えたことを」戦没者たちの「武勇が飾った (ἐκόσμησαν) のであり、ギリシア人のなかの極めてわずかな者たちにおいてのみ、彼らに対するこの言葉のように、言葉が実際の行動と釣り合っていると思えるだろう」と語っている。即ち、ポリスを発展させる原動力として称えられた内容 (ἄ...τὴν πόλιν ὑμνησα) を<sup>33</sup>、戦没者たちの行動が「ἐκόσμησαν 飾った」のであり、この飾ったという意味は、ペリクレスの言葉に釣り合う行動を、戦没者たちが貫き通したという意味に理解できる。このため、ペリクレスが前半部において語った言葉に、ポリスのために身を捧げた者たちの行動のみが釣り合えるのであり、戦没者たちは、前半部において語られる言葉を体現しているのである。

## 7. 参照箇所との関連

その前半部との密接な接続を表すように、42章4節には、40章冒頭と強い関連性を示す表現が現れる。

32 Marchant (1891) p.179は、ここでの「σημείους 証し」を、戦没者がポリスに身を捧げたことと ('[T]he manifest proofs [σημείους を指す] are the acts in which the fallen had a share.')

と理解している。しかし、「τὴν εὐλογίαν...ἐφ' οἷς νῦν λέγω φανεράν σημείους καθιστάς 戦没者への賛辞を証しによって明らかにした」という句は、前半部の言葉を長々と語ったこと (Δι' ὃ δὴ καὶ ἐμήκυνα τὰ περὶ τῆς πόλεως (42章1節)) を説明する分詞句であり、その前半部の言葉は、戦没者が身を捧げたことではなくあくまでポリスについて語っている。そのため、ここでの意味はむしろ、アテナイが偉大なポリスであることを示す前半部の言葉が、戦没者が偉大なポリスのために身を捧げたという賛辞の「証し」になるという点に求められる。このため、42章1節のこの言及は特に、41章5節において、「περὶ τοιαύτης...πόλεως οἶδε τε γενναίως δικαιοῦντες μὴ ἀφαιρεθῆναι αὐτὴν このようなポリスの存立をかけて、この者たち(戦没者たち)は高貴にもこのポリスが奪われてはならないと考え」と語られるときの、「γενναίως 高貴にも」という賛辞に対応している。

33 演説前半部の内容がポリス発展の原動力であることは、2巻41章2節末尾において、アテナイの今日の力を「τὴν ἀπὸ τῶνδε τῶν τρόπων ἐκτισάμεθα 我々はこの姿勢から獲得した」と語る文に確かめられる。



τῶνδε δὲ οὐτε πλούτου τις τὴν ἔτι ἀπόλαυσιν προτιμήσας ἐμαλακίσθη οὐτε πενίας ἐλπιδί, ὡς κἂν ἔτι διαφυγῶν αὐτὴν πλουτήσκειν, ἀναβολὴν τοῦ δεινοῦ ἐποιήσατο· τὴν δὲ τῶν ἐναντίων τιμωρίαν ποθεινότεραν αὐτῶν λαβόντες καὶ κινδύνων ἅμα τόνδε κάλλιστον νομίσαντες, ἐβουλήθησαν μετ' αὐτοῦ τοὺς μὲν τιμωρεῖσθαι...

(戦没者たちの) 誰も、今後の富の享受を優先させて弱々しくなることなく、また、貧しさから脱却することでこれから富裕にもなれるかもしれないという、貧しさにある人が心に抱く希望ゆえに、戦いにおける恐ろしいことを延期させることもなかった。むしろ、彼らは敵対者への報復を、それらよりも強く欲して引き受け、同時に危険のなかでもこの危険を最も kalon なものと考えて、その危険とともに、一方で敵に報復し(後略)。

この箇所を40章冒頭と比較すると、以下の表現に対応が認められる。

- ・「πλούτου 富」——40章(b-1)での「πλούτω 富」
- ・「οὐτε...ἐμαλακίσθη 弱々しくならず」——40章(a-2)での「ἄνευ μαλακίας 弱々しきなしに」
- ・「πενίας 貧しさ」——40章(b-2)での「πένεσθαι 貧しくあること」
- ・「διαφυγῶν αὐτὴν 貧しさから脱却すること」——40章(b-2)での「τὸ πένεσθαι...διαφεύγειν 貧しくあることから脱却すること」<sup>34</sup>
- ・戦いの危険を「κάλλιστον 最も kalon なもの」と考える——40章(a-1)での「φιλοκαλοῦμεν kalon を愛する」

このように、42章4節は40章冒頭と似通った表現を用いており、これら二つの箇所が関連をもっていることは明らかである。そして、戦没者たちが、ペリクレースの語った言葉に釣り合う行動を果たしたのであれば、40章冒頭での内容が、この42章においても反映されているはずである。このため、以下ではこの42章4節と40章の(a)～(c)を詳しく比較してみたい。

34 この対応はすでに Gomme (1956) p.132 に指摘されているが、Gomme はこの対応を確認する以上の記述を残していない。

## 8. 参照箇所との比較

まず、42章4節の各要素を個別に検討したうえで、42章4節全体と(a-1)の関連を検討し、その関連から(a-1)についての解釈をたてたい。

42章4節では、まず、戦没者たちが、富から得る楽しみを優先させて(πλούτου...τὴν ἔτι ἀπόλαυσιν προτιμήσας)弱々しくなることがなかった(οὔτε...ἐμαλακίσθη)と語られている。これは、富をもつ者に言及していることから、(b-1)(πλούτῳ...χρόμεθα)に対応している。(b-1)での、富もっていることを誇るのではなく(...ἢ λόγου κόμπῳ...)、具体的な成果のための行動(...ἔργου...καιρῷ...)に活用していくという姿勢は、成果のないところで、単に富もっていることを重視しないことから、42章4節での、富の楽しみを重視しない姿勢(οὔτε πλούτου...τὴν ἔτι ἀπόλαυσιν προτιμήσας)に反映されている。

42章では次に、戦没者が、貧しさから脱却して富裕になれるかもしれない(κἂν ἔτι διαφυγὸν αὐτὴν πλουτήσειεν)という期待ゆえに(πενίας ἐλπίδι)、戦いから怯むことがなかった(οὔτε...ἀναβολὴν τοῦ δεινοῦ ἐποιήσατο)と語られている。これは、(b-2)(τὸ πένεσθαι...αἴσχιον)に対応する。ただ、40章では、貧しさから脱却しようとしなことが恥である(μὴ διαφεύγειν ἔργῳ αἴσχιον)とされており、貧しさから脱却する努力を奨励する40章に対して、42章での内容はただちに結び付かない。このため、この部分については、何らか他の要素が関係していることが示唆される。後に確認したい。

そしてその後、42章では、戦いにおける危険を最も *kalon* なものと考えて(κινδύνων ἅμα τόνδε κάλλιστον νομίσαντες)、戦没者たちは戦いに向かっていったのだとあり、この *kalon* という形容詞は、(a-1)での、「φίλοκαλοῦμεν *kalon* を愛する」に対応している。42章での *kalon* は、敵に報復し戦いにおいて勝利をおさめようとする(τὴν...τῶν ἐναντίων τιμωρίαν)というその危険を(κινδύνων...τόνδε)、最も立派なものと考えて(κάλλιστον νομίσαντες)戦いに身を投じていった、という文脈にあるため、

ここでの *kalon* は、行動についての立派さを指している。

以上の点をふまえて、42章4節と(a-1)の関連を考えてみたい。42章4節では、富を享受する楽しみ(πλούτου...τὴν ἔτι ἀπόλαυσιν)、あるいはこれから富を獲得するかもしれないという期待(πενίας ἐλπίδι)が、戦いにおいて敵に報復することと対比され(τὴν...τιμωρίαν ποθεινότεραν αὐτῶν λαβόντες)、その比較をふまえて、敵への報復が最も立派なものとなされる(κινδύνων...τόνδε κάλλιστον νομίσαντες)。この対比において、戦没者が私的な富の楽しみを重視せず、それらよりも敵と戦うことをより重要なことと考えるという、私的な富の楽しみを戦いよりも重視しない態度は、自分の富を楽しむことについての「εὐτέλεια 儉しさ」の表れ、ではないだろうか<sup>35</sup>。自分の富を、自分が享受することについて儉しい態度をもつために、戦いにおいて、自分の富の楽しみ(πλούτου...τὴν ἔτι ἀπόλαυσιν)、あるいはこれから獲得するかもしれない富への期待(πενίας ἐλπίδι)に動かされること

35 εὐτέλεια が自分の富を自分が楽しむことについての儉しさを表し得ることは、εὐτέλεια の『戦史』の他の用例に確認できる。8巻1章3節(シケリア遠征の失敗を知らされ困窮したアテーナイ人たちは) ὁμοίως δὲ ὡς ἐκ τῶν ὑπαρχόντων ἐδόκει χρῆναι μὴ ἐνδιδοῖναι, ἀλλὰ παρασκευάζεσθαι καὶ ναυτικόν, ὅθεν ἂν δύνωνται ξύλα ζυμπορισμένους, καὶ χρήματα, καὶ τὰ τῶν ζυμμάχων ἐς ἀσφάλειαν ποιεῖσθαι, καὶ μάλιστα τὴν Εὐβοίαν, τῶν τε κατὰ τὴν πόλιν τι ἐς εὐτέλειαν σωφρονίσει...'. 8巻4章1節(シケリア遠征が失敗した年の冬季にアテーナイ人たちは) ...καὶ τὸ τε ἐν τῇ Λακωνικῇ τεῖχιμα ἐκλιπόντες ὁ ἐνοφκοδόμησαν παραπλέοντες ἐς Σικελίαν, καὶ τὰλλα, εἴ ποῦ τι ἐδόκει ἄχρειον ἀνάλκεσθαι, ξυστελλόμενοι ἐς εὐτέλειαν...'. 8巻86章6節(アテーナイ本国の四百人評議会から離反したサモスのアテーナイ軍のもとに、アテーナイ本国から派遣された使節に対してアルキピアデースが語って) εἰ δὲ ἐς εὐτέλειαν τι ζυντέμηται ὥστε τοὺς στρατευομένους μᾶλλον ἔχειν τροφήν, πᾶν ἐπαινεῖν...'. この他、εὐτέλεια の同系統の言葉として、他には8巻46章2節に εὐτελέστερα の用例がある。(アルキピアデースがティッサバルネースに向かってギリシアにどのように対処すべきかを助言して) εὐτελέστερα δὲ τὰδ' εἶναι, βραχεὶ μορίῳ τῆς ἀπαρίας καὶ ἅμα μετὰ τῆς ἑαυτοῦ ἀσφαλείας αὐτοὺς περὶ ἑαυτοὺς τοὺς Ἕλληνας κατατρίψαι...'. この形容詞の形では、「費用のかからない」という意味が語られている。しかし、εὐτέλεια という名詞形での『戦史』中の他の三例は、すべて同じ「ἐς εὐτέλειαν 儉約のために」という表現であり、それらはいずれも出費を切り詰める(σωφρονίσει, ξυστελλόμενοι, ζυντέμηται) という表現とともに用いられている。このため、『戦史』中の εὐτέλεια の他の用例は、この言葉が、出費を切り詰めるときの目的となる概念であることを示しており、金銭をふんだんに使うこととの反対の概念を表している。このため、(a-1)での「μετ' εὐτελείας 儉しさとともに」は、原義としては、金銭を多量に用いることなく、という意味を表している。このため、その「μετ' εὐτελείας 儉しさとともに」という表現が、「自分の富を浪費することなく」という意味を有していると考えられることは自然である。その、自分の富を浪費することなく、という(a-1)の意味から、42章4節での、自分の富を重視せずに、その富を楽しむことよりも戦いを重視するという内容には飛躍があるが、富を浪費しないという節制の姿勢が、戦場にあっても、その富の楽しみを捨てて顧みないという姿勢につながるといえ、関連を認めることができる。

なく、戦いに向かっていける。このため、42章の文脈は、自分の富を自分が楽しむことについての儉しい態度を前提としている。この点をふまえると、(a-1)と42章4節のあいだには、次の関連を認めることができる。(a-1)における「εὐτέλεια 儉しさ」が、出費を切り詰める儉約を意味し、富の浪費とは反対の概念を表していることから、その儉しさを、自分の富を浪費することのない儉しさと理解すれば、その節制的な姿勢が、42章4節での、私的な富の楽しみ (πλούτου...τὴν ἐπι ἀπόλαυσιν, πενίας ἐλπίδι) ゆえに怯むことをせず、敵と戦うことをより重要なことと考える (τὴν...τιμωρίαν ποθεινοτέραν αὐτῶν λαβόντες) 姿勢につながっている。

42章4節においてはさらに、戦没者たちが、そのような節制的な態度をとるなかで、戦いの危険を「κάλλιστον 最も立派なもの」と考えて戦いに身を投じていったと語られている。このことは、まず先に確認したように、この文脈での *kalon* が行動についての立派さであることを示し、そしてその立派さの追求が、私的な富を顧みない節制的な態度と共にあることを示している。このことから、42章4節での *kalon* の意味について、より具体的に考えることができる。即ち、立派な行動を追求するなかで、私的な富の楽しみを捨てることが語られているため、ここで立派な行動として念頭におかれているのは、自分の私的な財産にかかわる活動とは切り離された、特にポリスのために貢献するという社会的に名誉となる行動である。

以上をふまえると、42章4節においては、立派な行動としての *kalon* の追求が語られ、その *kalon* の追求が、私的な富についての節制的な態度とともにおこなわれることから、特にポリスにおいて名誉となる行動の追求が語られている。この42章4節の内容は、*kalon* の追求と、その追求を節制的な態度をもっておこなうことを語っている点で、(a-1)「φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας 儉しさとともに *kalon* を愛する」と、表現の上のみならず、内容的にも強く結びついている。このため、(a-1)が42章4節へと反映されているとすると、42章4節から逆算して(a-1)の意味を考察することができる。つまり(a-1)の全体は、立派な行動の追求を語っており、その立派さの追求が、自分の富についての儉しい態度とともにおこ

なわれることを語っている。この基本的な理解をふまえた上で、(a-1)が立派な行動の追求を語るなかでも、自分の富についての儉しい態度とともにそれをおこなうと限定する意味を強調すると、42章4節において打ち出されるところの、ポリスにおいて名誉となる行動の追求が前面に出ると考えられることができる<sup>36</sup>。

ここまで(a-1)と42章4節の関連をみてきたが、42章4節には、(a-2)「φιλοσοφούμεν ἄνευ μαλακίας 弱々しきなしに知恵を愛する」も反映されている。42章では、私的な富の楽しみ(ἀπόλαυσιν)や期待(ἐλπίδι)を、敵に報復して戦う名誉と比較したうえで(τὴν...τῶν ἐναντίων τιμορίαν ποθεινοτέραν αὐτῶν λαβόντες)、戦いに向かっていくと語られている。そのときに、富の楽しみと戦いによる敵への報復をそれぞれ理解し、それらを比較した上で戦いに向かうことは、40章3節での、「κράτιστοι δ' ἄν τὴν ψυχὴν δικαίως κριθεῖεν οἱ τά τε δεινὰ καὶ ἡδέα σαφέστατα γινώσκοντες καὶ διὰ

36 このとき、(a-1)において、立派な行動の追求が、富についての儉しい態度とともに語られていることは、Bosworth (2000) p.11. 注46が強調する、「φιλοκαλούμεν *kalon* を愛する」という語と富の関連にかかわっているかもしれない。Bosworth は、φιλοκαλούμεν の形容詞形 φιλόκαλος の用例として次を挙げており、それらの用例は、この言葉が一般的な意味において何らか富裕なものとの関連で用いられていることを示唆している。クセノポーン『ソクラテースの思い出』3巻11章9節 'τῖνι οὖν, ἔφη, τοιοῦτο φίλους ἂν ἐγὼ θηρώην; ἐάν ἡ Δί', ἔφη, ἀντί κυνὸς κτήση, ὅστις σοὶ ἰχνεύων μὲν τοὺς φιλοκάλους καὶ πλουσίους εὐρήσει, εὐρῶν δὲ μηχανήσεται ὅπως ἐμβάλη αὐτοὺς εἰς τὰ σά δίκτυα. καὶ ποῖα, ἔφη, ἐγὼ δίκτυα ἔχω;' 同『キュエロスの教育』1巻3章3節 'ἀντασπαζόμενος δὲ ὁ πάππος αὐτὸν καὶ στολὴν καλὴν ἐνέδουσε καὶ στρεπτοῖς καὶ ψελίοις ἐτίμα καὶ ἐκόσμη, καὶ εἴ ποι ἐξελαύνοι, ἐφ' ἵππου χρυσογαλίον περιήγειν, ὥσπερ καὶ αὐτὸς εἴθετι πορεύεσθαι. ὁ δὲ Κύρος ἄτε παῖς ὄν καὶ φιλόκαλος καὶ φιλότιμος ἦδετο τῆ στολῆ, καὶ ἰπεύειν μανθάνων ὑπερέχαιρεν.' イソクラテース1番9-10節 'οὐδὲ τὸν πλοῦτον παρακαίριος ἠγάπα, ἀλλ' ἀπέλαυε μὲν τῶν παρόντων ἀγαθῶν ὡς θνητὸς, ἐπεμελεῖτο δὲ τῶν ὑπαρχόντων ὡς ἀθάνατος. οὐδὲ ταπεινῶς διώκει τὸν αὐτοῦ βίον, ἀλλὰ φιλόκαλος ἦν καὶ μεγαλοπρεπὴς καὶ τοῖς φίλοις κοινός...' 同1番27節 'εἶναι βούλου τὰ περὶ τὴν ἐσθῆτα φιλόκαλος, ἀλλὰ μὴ καλλοπιστής. ἔστι δὲ φιλόκαλον μὲν τὸ μεγαλοπρεπὲς, καλλοπιστοῦ δὲ τὸ περιεργον.' このため、「φιλοκαλούμεν *kalon* を愛する」に一般的に富との関連があるとすれば、ペリクレーは『戦史』40章において、「φιλοκαλούμεν *kalon* を愛する」に「μετ' εὐτελείας 儉しさとともに」という限定をつけることで、φιλοκαλούμεν の意味から富の要素を除外していると考えられる。そしてそのように、φιλοκαλούμεν についての一般通念における意味から、μετ' εὐτελείας という限定によって富にかかわる要素が排除されるとすれば、「φιλοσοφούμεν 知恵を愛する」の一般通念における意味から、ためらい(δκνον)の弱々しさが排除される(ἄνευ μαλακίας)という Wardman (1959) が(a-2)について理解するのと同じ構造を(a-1)についても認めることができる。ただ、『戦史』のこの箇所でのφιλοκαλούμεν にこのような富との連想をうかがわせる直接のテキストがないため、この点については今後の検討課題としたい。

ταῦτα μὴ ἀποτρεπόμενοι ἐκ τῶν κινδύνων 恐ろしいことと快いことを最もはつきりと理解し、それによっても危険に背を向けぬ者が、その心において最も強靱であると正当に評価されるであろう」と語られる内容と呼応している（特に下線部）。第5節において確認したように、この40章3節の内容には、(a-2)とのつながりを認めることができ、その意味で、(a-2)の内容が42章4節に反映されていることが確かめられる。ただ、42章4節の言葉遣いからみても、42章4節に明示的に現れるのは(a-1)との関連であり、(a-2)とのあいだには間接的な関連のみを認めることができる。

### 9. 比較をふまえて——(a)と(b)のつながり

以上をふまえると、40章の(a)～(c)全体の意味について手掛かりが得られる。(a)では、(a-1)立派な行動を追求しつつ(φιλοκαλοῦμεν)、自分の富の享受については儉しい態度をもち(μετ' εὐτελείας)、(a-2)実践的な知恵を追求しつつ(φιλοσοφοῦμεν)、知恵に訴えることが孕む弱々しさをもたない(ἄνευ μαλακίας)ことが語られている。第4節において論じたように、(b)と(c)の結び付きは、(a)が(b)よりも狭い領域を扱い、かつ、(b)の前提になっていることを求めている。この二つの要件のなかで、ここでの(a)の理解は、個人の内面的な姿勢を語っていることから、まず(b)の私的な経済よりも狭い領域を扱っていることがおさえられる。そして、(b-1)での、自分の財産(πλοῦτος)を、単に所有していることを自慢するため(λόγου κόμπου)ではなく、具体的な行動のために使っていく(...ἔργου...καιρῶ...χρόμεθα)という内容は、自分のために富を使うのではなく、行動のために出費していくという内容をもつことから、自分の富の享受についての儉しい態度と、その儉しさを持ちながら立派な成果を求める(a-1)の姿勢(φιλοκαλοῦμέν...μετ' εὐτελείας)を前提としている。また、(a-1)は、立派な行動の追求(φιλοκαλοῦμεν)が、富を浪費することなく(μετ' εὐτελείας)おこなわれることを語っており、そのように立派さの追求が、富の浪費とは無関係におこなわれることが(b-2)の前提となる。というのも、(b-2)での、貧しい人が、今のわずかな財産を恥とは思わずに(τὸ πένεσθαι οὐχ ὁμολογεῖν τινὶ αἰσχρόν)、今の地位に甘んじて行動に出ないこ

との方をより大きな恥とみなす (μη διαφεύγειν ἔργω αἴσχιον) ことは、自分の財産の多寡でもって自らの恥と立派さを考えないことから、立派さの追求を富の浪費から切り離す(a-1)の姿勢が前提になっている。また、(a-2)(φιλοσοφοῦμεν ἄνευ μαλακίας)は、実践的な知恵を追求しつつ、そのように思考に訴えることが孕む弱々しきをもたないことを語っている。(b-1)において富を活用していくにせよ(πλούτῳ...ἔργου μάλλον καιρῶ...χρώμεθα)、(b-2)において貧しさから脱却しようとするにせよ(τὸ πένεσθα...μη διαφεύγειν ἔργω αἴσχιον)、既存の地位に甘んじずに新たな成果を追い求める努力をおこなうときには、当然のこととして、自ら思考をはたかせ、そのように考えた結果を実行に移すことが重要になる。そのため、(a-2)での広い意味での実践知の追求(φιλοσοφοῦμεν)と、その知恵の追求が孕む弱々しきをもたないこと(ἄνευ μαλακίας)は、(b)全体についての重要な前提になっている<sup>37</sup>。このため、(a-1)と(a-2)の両方が、(b)全体の前提となる内容を有していることが確認できる。

## 10. 比較をふまえて —— (c) の意味

(a)と(b)の結び付きについてはこのように理解できる。他方で、(b)が(c)の前提になっていることをふまえると、(a)は(b)を介して(c)の前提にもなっている必要があり、その点もおさえてみたい。(c-1)での、私的な事柄に劣らずポリス公共のための活動に取り組む(οἰκείων ἅμα καὶ πολιτικῶν ἐπιμέλεια)という内容が、(a-1)の姿勢を前提としていることがまず確認できる。というのも、自分の富の享受についての儉しい態度(εὐτέλεια)を、最も顕著に示すのが、自分のためではない、ポリス公共のための貢献である。そして、ポリス公共への貢献は、自分の富の享受についての儉しさをもちながら(μετ' εὐτελείας)、ポリスにおいて立派な行動

37 ただ、(b)の活動に求められる知恵には、経済活動における実践知が含まれ、その点、葬礼演説のなかで、「τρόπος 姿勢」にかかわる活動として主に語られる、軍事(39章4節)と政治(40章2節)にかかわる活動からみて例外的な知恵が語られていることになる。ただ、第10節において論じるように、(b)は(c)という最終的な論点を準備する論点であり、議論の一つの段階として、広義の実践知のなかで例外的に経済活動が扱われること自体に問題はない。その点、(a-2)での「φιλοσοφοῦμεν 知恵を愛する」は、(a-2)の段階では相当に広い意味での実践知を意味していることになる。

を追い求める姿勢（φιλοκαλοῦμεν）を直接表している。また、(c-2) 貧しい人の政治への関心（ἐτέροις...τὰ πολιτικά μὴ ἐνδεῶς γινῶναι）も、先に第3節において論じたように、自分の貧しさを恥とは思わないこと（τὸ πένεσθαι οὐχ ὁμολογεῖν τινὶ αἰσχρόν）が重要な前提になっており、その価値意識を裏付けるのが、立派な行動の追求（φιλοκαλοῦμεν）を富の浪費から切り離して（μετ' εὐτελείας）考える(a-1)の姿勢である。そして、(b)の場合と同様に、(c-1)でのポリスのための取り組み（πολιτικῶν ἐπιμέλεια）をおこなうためには、ポリス公共の事柄について思考し、その思考の結果を実行することが重要になる。また、(c-2)において、たとえ積極的に政治に参加することをしなないとしても、自分の仕事に多忙ななか（πρὸς ἔργα τετραμμένοις）ポリスの事柄を理解し、それも単に理解するだけではなく、ふかく熟知する（τὰ πολιτικά μὴ ἐνδεῶς γινῶναι）ためにも知恵が必要である。その知恵によるためらい（40章3節での ὄκνον）をもたないこと（ἄνευ μαλακίας）の重要性は(c-2)において直接は語られないものの、民会や裁判において票を投じるという行為は、貧しい人が自ら思考して行動する機会をもっていたことを示している。このため、(b)と同じように、(c)もまた(a-2)を重要な前提としている。以上をふまえると、(a)の全体は、(c)の前提にもなっている。

(a)と(c)の関連はこのように理解できるが、この、ポリス公共のための貢献（πολιτικῶν ἐπιμέλεια, τὰ πολιτικά...γινῶναι）という論点が、(a)～(c)のまとまりの最後におかれていることは重要である。これまでみてきたように、(a)は(b)の姿勢の前提となる内容を有しており、また、(b)は(a)とともに(c)の姿勢の重要な前提となっている。このため、(a)と(b)を前提として語られる(c)は、(a)～(c)全体が最終的に語りた論点を表している。つまり、(a)～(c)のまとまりは、(c)でのポリスのための貢献意欲という論点に終着しており、個人の内面的姿勢を一般的に語る(a)は、最後にはポリスのために積極的に貢献しようとする姿勢へとつながっている。このことは、42章において戦没者を称えるときに、(a)～(c)と似通った表現が現れる理由を説明している。二つの箇所はともに、ポリスのために行動することを語っており、40章において平時のポリスへの貢献意



欲につながっていた(a)は、42章では戦時について、特にその(a-1)の姿勢が、戦没者がポリスのために、自分を犠牲にして勇敢に戦うときの姿勢へとつながっていくことになる<sup>38</sup>。

## 11. 結論、および先行研究のなかでの位置付け

これまでみてきたように、40章の(a)の意味は、(a-1)については42章4節と、(a-2)については40章3節と比較することで明らかになる。(a)は、(a-1)個人が立派な行動を追求するなかで(φιλοκαλοῦμεν)、自分の富を自分が享受することについて儉しい態度をもつ(μετ' εὐτελείας)ことと、(a-2)個人が実践的な知恵を追求しつつ(φιλοσοφοῦμεν)、知恵に訴えることが孕む弱々しさをもたない(ἄνευ μαλακίας)ことを語っている。その(a)の内面的姿勢を前提として、(b)での、個人が既存の経済的地位に甘んじずに果敢に行動に打って出ること(πλούτῳ...ἔργου...καιρῷ... χρώμεθα, ...τὸ πένεσθαι...μὴ διαφεύγειν ἔργῳ αἴσχιον)が語られ、さらにそれをふまえて、最終的に(c)において、ポリス公共のための行動に、私的な活動に劣らず積極的に取り組み(ἐν...τοῖς αὐτοῖς οἰκείων ἅμα καὶ πολιτικῶν ἐπιμέλεια)、その余裕がなくても(ἑτέροις πρὸς ἔργα τετραμμένοις)、ポリスの事柄を熟知している(τὰ πολιτικά μὴ ἐνδεῶς γινῶναι)ことが語られる。

この(a)の理解は、(a)において広い意味での何らかの文化的な要素が語られていると理解する伝統的な解釈とは異なる解釈であり、伝統的な解釈が抱えた問題点に答えるものである。つまりGomme (1956)が指摘した、「εὐτέλεια 儉しさ」が金銭的な出費を抑える儉約を意味することから、「φιλοκαλοῦμεν *kalon* を愛する」を建築や美術工芸を指すものと理解することに困難があるという指摘である。本論は「φιλοκαλοῦμεν *kalon* を愛す

38 先に触れた、貧しさからの脱却という言葉が、40章(b)(διαφεύγειν ἔργῳ)と、42章(διαφυγὼν αὐτῆν)において異なる仕方でも語られていることは、この40章と42章のあいだのつながりによって理解することができる。40章(b)は、日常の場面において貧しさからの脱却を奨励しており、42章4節は、戦場において、貧しさから脱却する希望を捨てて戦いに向かっていくと語っている。このため、40章(b)をふまえると、42章4節は、日常での行動目的を、戦場でのより高い目的のために捨てることを語っており、同じ言葉遣いを対比をつけて繰り返すことで、戦場を最優先する姿勢が前面に出ることになる。

る」を行動の立派さを指すものと理解することから、この Gomme の指摘した困難を解消することができる。そして、伝統的な解釈を維持する de Romilly (1962) と、伝統的解釈を修正する Rusten (1985) に対し、本論は (a)～(c) の連関を指摘することで反論している。また、本論は伝統的な解釈に反論していることから、特に (a-2) について Wardman (1959) と Bosworth (2000) の解釈を受け入れている。ただ、Wardman が「φιλοκαλοῦμεν *kalon* を愛する」が平時を指し、「μετ' εὐτελείας 儉しさとともに」が戦時を指すと理解し、また Bosworth が「φιλοκαλοῦμεν *kalon* を愛する」が文化的活動を指し、「μετ' εὐτελείας 儉しさとともに」がポリスに貢献する活動を指すと理解したように、伝統的な解釈に反論するこれら二つの解釈は、(a-1) について、文の内部で念頭におかれている領域を区別していた。その点、本論は、(a-1) が個人の内面的な姿勢のみを語っていると理解することで、Wardman と Bosworth の解釈が抱えた不自然さを解消できる。そして、(a-1) のそれぞれの要素についてみると、「μετ' εὐτελείας 儉しさとともに」を自分の富を楽しむことについての儉しさと理解する本論の解釈は、Bosworth の解釈に近いものがある。というのも、Bosworth は、この「εὐτέλεια 儉しさ」を、建築や祭典などの贅沢に溺れることのない勤勉さと理解しており<sup>39</sup>、儉しさを贅沢に溺れないことと理解する点で、本論と似た解釈をとっている。ただ、本論は、この「εὐτέλεια 儉しさ」をどのような文脈で理解するのかという点で Bosworth と異なっている。Bosworth が、「φιλοκαλοῦμεν *kalon* を愛する」をアテーナイの建築や祭典といった文化的活動として理解し、「εὐτέλεια 儉しさ」を、その贅沢に溺れないこととして理解するのに対し、本論は「φιλοκαλοῦμεν *kalon* を愛する」を、42章4節を根拠として立派な行動の追求と理解しており、「εὐτέλεια 儉しさ」は、その立派な行動の追求が、自分の富を浪費しない節制的な態度でもっておこなわれることを指していると理解している。本論は、Bosworth の解釈が「φιλοκαλοῦμεν *kalon* を愛する」の意味についてテキスト上の根拠

39 Bosworth (2000) p.11 'The Athenians might have a love of beauty, (中略) but it takes place against a background of industry.' また 'Pericles' reply to the implied criticism (田園部の市民にとって中心市での建築や祭典が富の浪費に思えるという批判) is brief but effective. We may have a taste for the beautiful, but we are not slaves to luxury.'

がなかった点と、Bosworth の解釈の場合「φιλοκαλοῦμεν *kalon* を愛する」が (b)～(c) へとどのように反映されるのかが判明でなかった点について、問題を解消できるものである<sup>40</sup>。

### 参考文献

- Bosworth, A. B., 'The Historical Context of Thucydides' Funeral Oration', in *The Journal of Hellenic Studies*, Vol.120 (2000), pp.1~16
- Croiset, A. (ed.), *Thucydide, Histoire de la Guerre du Péloponnèse* (Librairie Hachette, Paris, 1886)
- de Romilly, J., *Thucydide, La Guerre du Péloponnèse, Livre II* (Les Belles Lettres, Paris, 1962, Budé)
- Edmunds, L., 'Thucydides ii. 40. 2', in *The Classical Review*, Vol. 22, No. 2 (Jun., 1972), pp.171~172
- von Essen, M. H. N., *Index Thucydideus* (apud Weidmannos, Berolini, 1887)
- Gomme, A. W., *A Historical Commentary on Thucydides, Volume II* (Clarendon Press, Oxford, 1956)
- Hornblower, S., *A Commentary on Thucydides, Volume I* (Clarendon Press, Oxford, 1991)
- Jones, H. S. (ed.) *Thucydidis Historiae* (Clarendon Press, Oxford, 1900, OCT)
- Larson, R. H., 'A Note on Thucydides 2:40.1', in *The Classical Journal*, Vol.67, No. 1 (Oct. – Nov., 1971), pp.67~68
- Marchant, E. C., *Thucydides, Book II* (Macmillan & co LTD, London, 1891)
- Poppo, E. F., *Thucydidis de Bello Peloponnesiaco Libri Octo, Vol. I.* (Sumptibus Fridericae Hennings, Gothae, 1843)
- Rusten, J. S., 'Two Lives or Three? Pericles on the Athenian Character (Thucydides 2.40.1-2)', in *The Classical Quarterly*, Vol. 35, No. 1 (1985), pp.14~19
- Rusten, J. S. (ed.), *Thucydides, The Peloponnesian War, Book II* (Cambridge University Press, Cambridge etc., 1989, Cambridge Greek and Latin Classics)
- Wardman, A. E., 'Thucydides 2. 40. 1', in *The Classical Quarterly*, Vol.9, No.1 (1959), pp.38~42

40 第1節において述べたように、(a) はペリクレスがアテーナイ人の姿勢を一般的に述べる箇所であり、ポリス発展の原動力として「τρόπος 姿勢」を重視しているペリクレスにとって（今日のアテーナイの力について「ἦν ἀπὸ τῶνδε τῶν τρόπων ἐκτισάμεθα 我々はこの姿勢から獲得した」（41章2節末尾）と語っている）、(a) が重要な意味をもっていることが示唆される。本論は(a)の解釈を考え直すものであり、本論の解釈が葬礼演説全体の理解にどのようにかわるのか、今後の検討課題としたい。